

5 専門学校における看護研究の到達目標についての検討

— 卒業時学生の自己評価の結果を分析して —

奈良県立医科大学附属看護専門学校

津 田 紀 子 (10 回生)

1. はじめに

看護専門学校における研究指導の到達目標は明確でなく、各学校でそれぞれの目標を設けて実施している現状である。本校では、事例研究を通して研究的態度が身につくことを目標としているが、今回は卒業時学生の自己評価の結果を、本校3年間の研究に関する教育計画の内容から考察し、到達目標についてと今後の課題を検討した。

2. 調査分析方法

本校二年次の看護研究論であげられている、Unit : Nursing Research. SBO (個別行動目標) 22項目 (服部裕氏による) を使用して、24回生35名、25回生37名に5段階評価法 (1点～5点) で自己評価させた。評価の時期は卒業時とした。SBO 22項目は表1に示した。その結果と表2に示した本校の事例研究に関する教育計画を照査し、分析を試みた。

表1 看護研究 (Nursing Research) の SBO

1. Nursing についての内外の歴史の概略を述べることができる。
2. 看護研究の定義および研究論文の種類について述べることができる。
3. Nursing の level について述べることができる。
4. 仮設の定義・種類・検定法について述べることができる。
5. 自然科学的研究および社会科学的研究の特徴および両者の相違点について述べることができる。
6. 文献調査の仕方を知っていて実行することができる。
7. 科学研究の定義・科学研究の備えるべき条件について述べることができる。
8. 研究論文の一般的構成について述べることができる。
9. 看護研究の対象とテーマについて述べることができる。

10. 資料収集法・資料処理法について定量的資料と定性的資料それぞれの場合の概略を述べることができる。
11. Conference の果す役割について述べるができる。
12. 口演用原稿と雑誌掲載用原稿との完成順序を述べ、かつ両者の相違点について論じることができる。
13. 論文の内容にみあった正しい題名を付けることができる。
14. 論文の内容の一般的章区分法について述べ、それぞれに必要な内容の概略をあげるができる。
15. 文献の引用の仕方・記載法を述べるができる。
16. 謝辞の述べ方・記載法を述べるができる。
17. 抄録の意義を知っており制限を守って抄録を作ることができる。
18. 原稿用紙を正しく使いこなすことができる。
19. 研究過程の展望について述べるができる。
20. 文献を要領よく抄読することができる。
21. 毎日の看護を研究的態度で実践することができる。
22. 適当な事例を自ら選定して研究をまとめ事例報告として発表することができる。

服部 裕（大阪府立病院脳神経外科部長）による

表2 本校の事例研究に関する教育計画

学年	項 目	ね ら い
1	☆論文レポートの書き方講義（原稿用紙の使用法を含む） ☆演習（討議法）のなかで文献調査の方法指導 ☆3年生の事例研究発表聴講	① 論文・レポートの書き方が理解できる。 ② 原稿用紙の正しい使い方が理解できる。 ③ 文献調査の方法が理解できる。 ④ 発表の方法について理解できる。
2	☆看護研究論講義（15時間） ☆図書館での文献調査演習 ☆看護ゼミナールの内容をまとめグループで報告 ☆3年生の事例研究発表聴講	① 研究に必要な基礎知識が身につけられる。 ② 事例研究のとり組み方が理解できる。 ③ 事例研究の計画を立てることができる。 ④ 必要な文献が収集できる。
	☆事例研究のとり組み計画と実施	① 事例研究のとり組みができる。

3	☆中間報告 ☆論文提出 ☆事例研究発表会開催	② 論文作成ができる。 ③ 発表の技術が身につけられる。 ④ 研究発表会の企画・運営ができる。
---	------------------------------	---

下線 …… は26回生より

3. 結 果

自己評価の結果を表3で見ると、24回生の方が25回生に比較してやや標準偏差値が高くなっているが、各項目別の到達度はほぼ同様の傾向を示している。到達度の低いものは、1、2、3、4、5、7、10であり、比較的到達度の高いものは、8、9、13、15、16、17、18の項目である。次に22項目のなかから、本校の教育計画の深い10項目を選び図1に示した。この10項目の平均値は、24回生3.43（68.6%）、25回生3.39（67.8%）である。このうち、本校の卒業時到達目標である「毎日の看護を研究的態度で実践することができる。」は24回生2.83（56.6%）、25回生3.08（61.6%）、「適当な事例を自ら選定して研究をまとめ事例報告として発表することができる。」については、24回生3.09（61.8%）、25回生3.06（61.2%）となっている。さらにこれらの項目の自己評価割合を見ると、図2のとおりであり、毎日の看護を研究的態度で実践することができる。（5点）と評価したものは、24回生で3名、25回生で1名であった。さらに、適当な事例を自ら選定して研究をまとめ事例報告として発表することができる。（5点）と評価したものは、24回生で2名、25回生で1名であった。

次に、一学年からすでに目標としてあげている項目で、「原稿用紙を正しく使いこなすことができる。」10項目中には入っていないが、「研究論文の一般的構成について述べることができる。」「文献調査の仕方を知っていて実行することができる。」の項目については、3項目を平均して24回生3.38（67.6%）、25回生3.58（71.6%）と比較的到達度が高くなっている。それぞれの自己評価割合は、図3のとおりで、できると評価したものがや多くなっている。

次に三年次の事例研究で身につけたと思われる項目、「論文の内容にみあった正しい題名をつけることができる。」「謝辞の述べ方、記載法を述べることができる。」「抄録の意義を知っており制限を守って抄録を作ることができる。」については、4項目の平均が、24回生で3.9（78%）、25回生3.61（72.2%）となっており、先に述べた比較的到達度の高い項目と一致している。これを自己評価割合で見ると、図4の如くであり、出来ると評価したものが他の項目にくらべて多くなっているとはいえ、かなり評価が分散している項目もある。

表3 SBO項目別到達度

SBO 番 号	24 回 生			25 回 生		
	平 均	標準偏差	到達度(%)	平 均	標準偏差	※到達度(%)
1	2.3 1	1.0 4	4 6.2	2.5 7	0.7 5	5 1.4
2	2.1 1	0.8 5	4 2.2	2.6 2	0.6 7	5 2.4
3	2.5 1	0.8 7	5 0.2	2.5 7	0.6 8	5 1.4
4	2.0 3	0.8 4	4 0.6	2.4 9	0.6 8	4 9.8
5	1.9 1	0.8 7	3 8.2	2.3 4	0.8 8	4 6.8
6	3.0 6	0.8 9	6 1.2	3.3 4	0.7 6	6 6.8
7	2.2 6	0.8 7	4 5.2	2.6 5	0.8 5	5 3.0
8	3.4	0.8 0	6 8.0	3.5 8	0.8 6	7 1.6
9	3.4 3	0.9 0	6 8.6	3.4 1	0.6 3	6 8.2
10	2.5 4	0.9 1	5 0.8	2.8	0.6 7	5 6.0
11	2.8 3	1.1 1	5 6.6	3.5	0.6 7	7 0.0
12	2.8 9	0.7 1	5 7.8	3.0 8	0.6 7	6 1.6
13	3.4 3	0.8 4	6 8.6	3.3 5	1.0 1	6 7.0
14	2.8 5	1.1 4	5 7.0	3.1 2	0.6 1	6 2.4
15	4.0	0.8 6	8 0.0	3.6 5	0.7 4	7 3.0
16	4.2 6	0.7 3	8 5.2	3.8 1	0.6 9	7 6.2
17	3.8 9	0.9 8	7 7.8	3.6 4	0.8 3	7 2.8
18	3.6 9	0.9 2	7 3.8	3.8 1	0.8 0	7 6.2
19	2.7 4	0.6 5	5 4.8	2.9 5	0.6 5	5 9.0
20	3.2	0.9 2	6 4.0	3.0 3	0.7 9	6 0.6
21	2.8 3	0.9 3	5 6.6	3.0 8	0.6 3	6 1.6
22	3.0 9	0.8 4	6 1.8	3.0 6	0.6 6	6 1.2
総平均	2.9 5	1.1 0	5 9.0	3.1 1	0.8 6	6 2.2

※ 到達度(%)は5点を100%到達とした場合

図1 主要10項目の目標到達度

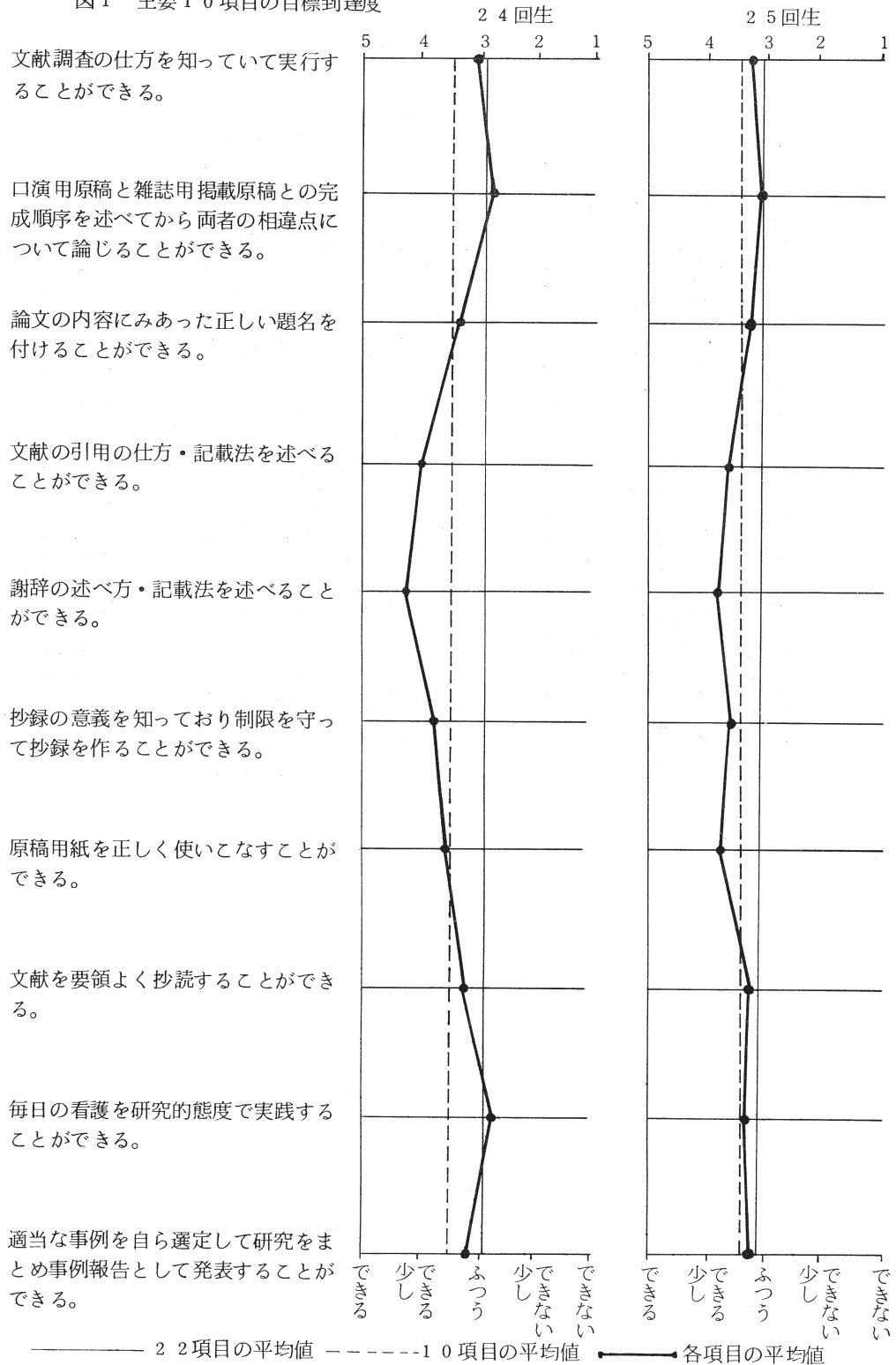
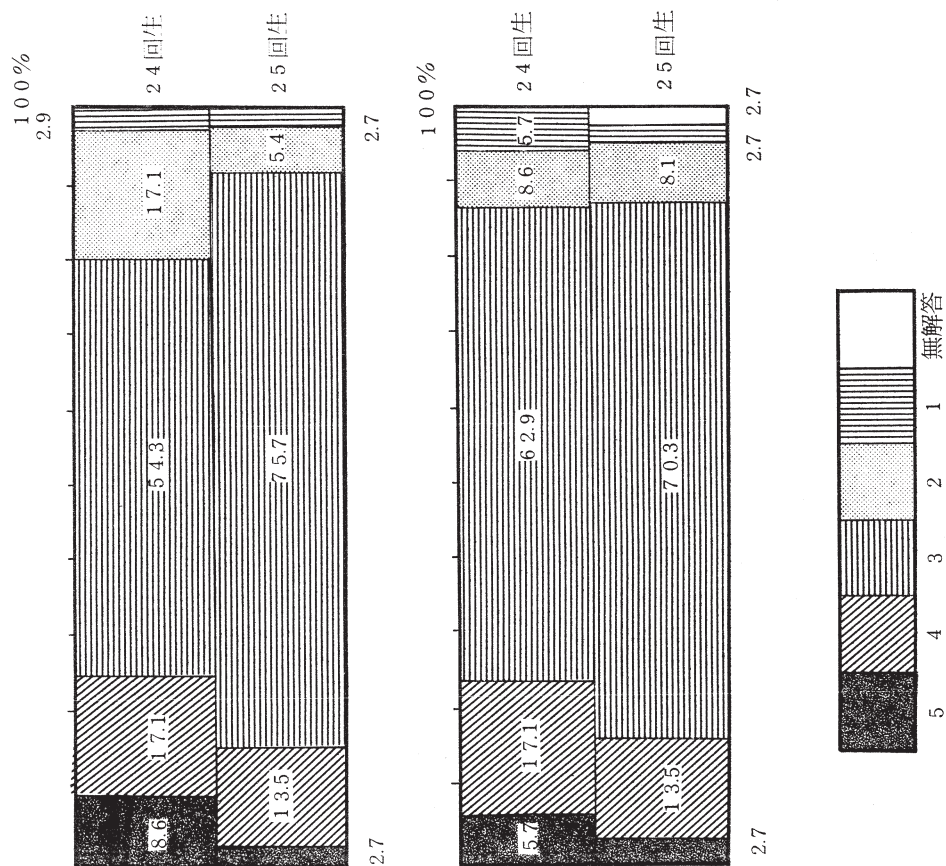


図2 卒業時到達目標2項目の到達度評価割合



毎日の看護を研究的態度で実践することができる。

適当な事例を自ら選定して研究をまとめ事例報告として発表することができる。

図 3 一年次よりの目標である項目の到達度評価割合

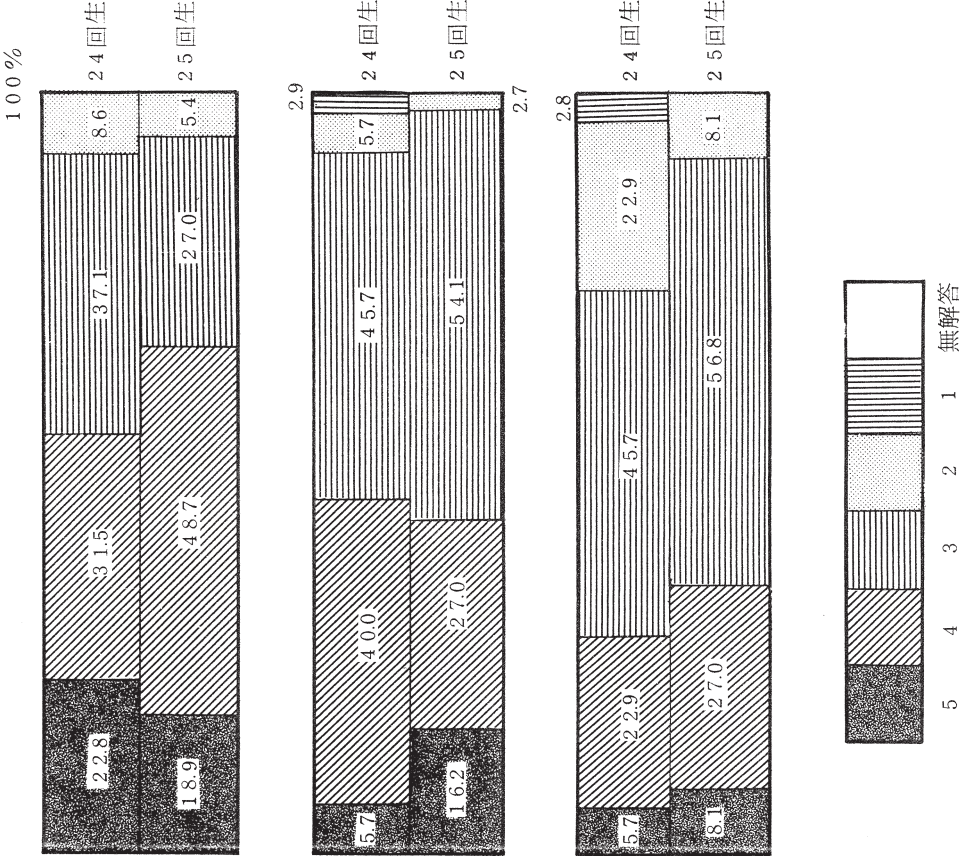
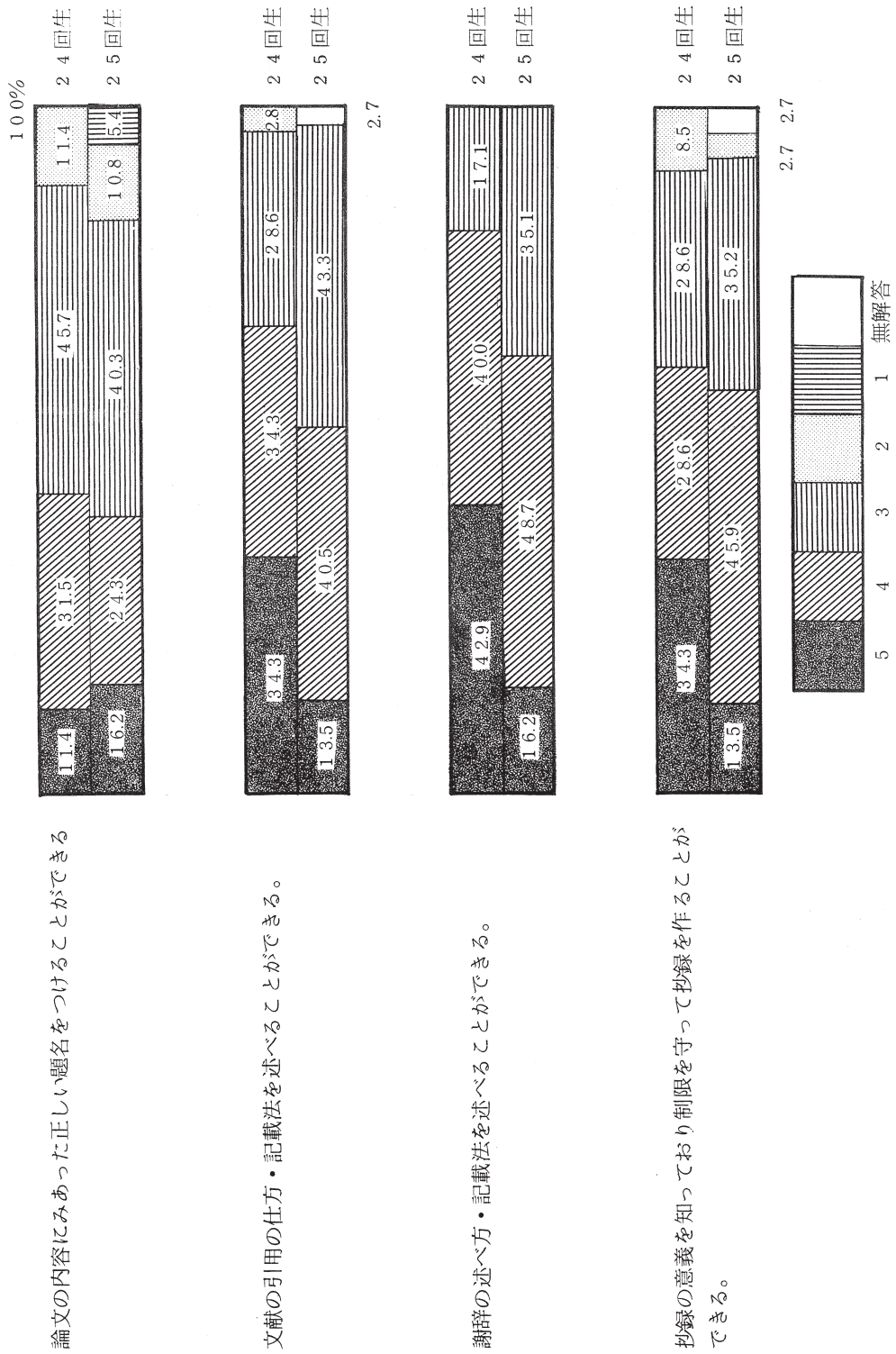


図 4 三年次の事例研究で身につけたと思われる項目の到達度評価割合



4. 考 察

全体として到達度の低い項目群は、看護研究論の講義終了後使用していないものであり、一般看護研究に関する知識レベルのものが多く、到達度の高い項目群は、本校の教育計画のなかで一年次から繰り返している項目と、事例研究のとり組みから身についたと考えられるものである。

一年次から繰り返し指導している、原稿用紙の使い方や文献調査の仕方についてなどは、最も基本的な項目であり、研究が出来るかどうかにかかわらず、看護学校で出来るようになっておく必要がある。そのためには、一年次から学生に到達目標を明示し、意識的に到達度を高めてゆく働きかけが必要である。その良い機会となるのが演習での指導だと考えられる。また、在学中は教師にたよっており、自らの行動として移すのには自信がない。ということが自己評価にあらわれていると考えられ、学生の主体的な活動をどのように引き出してゆかが今後の課題となる。特に、文献調査に関してはそのことが考えられる。

三年次の事例研究で身につけたと思われる4項目の目標到達度が比較的高いのは、事例研究の論文作成として、3年次の中間報告から論文提出にかけて集中的に指導を受けること、発表するにあたって苦労した内容で、体験のなかから身についた項目であると考えられる。特に事例研究発表会のための抄録集の作成や、後輩学生、先輩看護婦の聴講がよい刺激となり、発表に関する技術が身につくものと考えられる。また、聴講する側としても、一年次からすでに、テーマのつけ方や、抄録のつくり方について学んでいることが、聴講学生の感想からも明らかである。

研究的態度については、本校の卒業時到達目標でもあるので、高い到達度を期待するが、この領域の評価は情意的な側面であり、自己評価としては低くてもやむを得ない。研究的態度とは、物事の本質を洞察する姿勢であり¹⁾、問題意識を持ち、創造的・系統的に問題を解決する思考過程がふめる、ということだと考えている。専門学校においては、看護の実践が日々問題解決のとり組みであるよう看護過程の展開に重点がおかれている。その問題解決を創造的・系統的に実践できることが、「毎日の看護を研究的態度で実践できる」ということだと考えている。それは良い看護を展開するための基盤であると考えられ、看護の実践者を育成する専門学校においては是非必要なことである。そしてこれを身につけるためには、事例研究ばかりでなく、実習・ゼミナールなど学生のあらゆる活動場面がその機会となる。又、提出されたレポート類を通してその機会が得られる。教師はそのひとつひとつが学生の態度を評価する場面になることを考える必要がある。やはり一年次より意識的、段階的に評価することによって、この研究的態度の到達度も高めることができると考えられる。

アメリカにおける研究の教育内容では、短期大学レベルで研究そのものに従事するよう訓練

されるというよりは、むしろ系統だって問題を解決するにはどうしたらよいか、あるいは他の人の書いた文献を読んでいくにはどういった能力が必要かということに関して教育を受ける²⁾となっているが、専門学校の場合もこのレベルで考える必要があると思われる。

本校における今後の課題は、①文献調査ができ、さらに要領よく文献を抄読する能力を高めるための教育を計画的に実施する必要があること。②創造的・系統的に問題を解決してゆく態度を身につけるための意識的な働きかけを強化する必要があることである。そして卒業後も日々の看護を創造的にとり組み、事例研究については自信を持ってまとめ、発表することができることを目指す必要がある。

5. お わ り に

今回は、学生の自己評価のみによる分析であったため、学生の性格の反映もあり、明確な判断ができない点もあった。しかし、教育計画の問題点や今後の課題を検討するきっかけになったと考えている。これを機会に、教師側の評価を加え、研究指導の到達目標についてなおいっそうの検討をすすめたい。

〔 文 献 〕

- 1) 横山トヨミ：研究する姿勢の育て方。看護教育、23(7)、411～414、1982。
- 2) H. S. ウイルソン：看護研究概論。アメリカにおける「研究」の教育。看護研究、15(3)9～19、1982。
- 3) 瀬谷美子、他：座談会。看護研究指導のあり方をめぐって。看護研究、15(4)、7～21、1982。
- 4) 阿南和代、他：研究方法の種類による教育的到達度の相違と今後の課題。当校の卒業研究終了後の認識調査より。第10回日本看護学会集録・教育管理分科会、日本看護協会出版会、1979。
- 5) 大崎サヲコ、他：学生の看護研究の指導方法に関する一考察。研究に対する姿勢および研究のすすめ方について。第6回日本看護学会集録・教育管理分科会、日本看護協会出版会、1976。
- 6) 多田昭栄、他：看護学校（3年課程）における看護研究についての検討。第5回日本看護学会集録・教育管理分科会、日本看護協会出版会、1974。
- 7) 吉武香代子：看護実践と看護研究、看護、34(4)、111～121、1982。

質問 小林（7回生） 研究的態度を身につける、というその研究的態度というものの具体的内容は何か。

解答 研究的態度の評価の細項は設けていない。教師側の評価の機会としては、実習・演習、又はレポート類から学生の創造的系統的な問題解決能力として見ることも出来ると考えている。今回の学生の自己評価は学生個々の研究的態度についての考え方は違うと思う。